欠伸（あくび）

僕の小学校時代

高森　保

僕は国民学校の六年生だった
母の代わりに　僕を育ててくれた祖母が
明日を待ちえない程　衰弱して　家に居た
僕は学校へ欠席せずに　行っていた
授業中だった
突然　僕は担任先生に胸倉つかまれ　立たされた
この非国民！　畏れ多くも陛下の話をしているのに　欠伸しやがって！

往復びんたで倒された

ヤングケアラーなんて　言葉もなかった
殺すか殺されるかの戦時中で　沖縄が奪われ　次は南九州か
どうせ死ぬのなら　天皇陛下万歳と
この年でも手榴弾配ってもらって敵戦車と対決自爆
と　そんな漫画みたいな　不貞腐れた気持ちだった

祖母は　その数日後　息を引き取った
その知らせを　学校にいた僕にも知らされ　早引して帰った
骨と皮だけのやせこけた祖母だったが
自分の粥(かゆ)を　お前食って元気だせな
と僕に勧めていた祖母だったのだ